

## 巻頭言

足摺縄文巨石

# イワクラ(磐座)とともに

監事 富田無事生

私の育った土佐清水市松尾集落は、足摺半島先端近くの西側に位置し、東に足摺半島先端部、西に名勝臼碁を望む素晴らしい景観の地です。

父は、終戦直後の混乱で食糧事情が悪化し、さつまいもや麦を入れたご飯(芋飯・麦飯)を食べるのはいやだと言って、「田んぼ」を借りて米作りをはじめました。

唐人駄場近くの三反(三千平方メートル)程の山の田んぼ(以下「山田」という)です。

圃場の形状は、南に面した半円形の中央を、北から南向きに小川が流れ、東側は一段と高く、西側は北側より少し小高く南向きのお椀を半分に割ったような数枚で構成された棚田で、西側は一反三畝(一千三百平方メートル)ほどの大きな一枚の田です。その外側には、高さ一メートル

から二メートルの石垣が、西端から東半分位まで取り囲み、東側の残り部分は、小石が積まれていません。

中心の小川から東側に、約五メートル程の斜面にわずかに低くなつて猪が容易に飛び越えられる場所があり、すぐ内側には長径三メートル、深さ四メートルほどの掘り切りの巨大落とし穴が不気味な口をあけており、家族からは危険なので近寄らないよう厳しく言われておりました。

西側の石垣は、地域では「猪囲」(ししかこい)と呼ばれるもので「落とし穴」は猪が「猪囲」に阻まれ大好物の稲にありつけなければ「猪囲」を壊してでも入る為、抜け道としてわざと囲いの石積を低くし、そこに入ってくれば落とし穴が待ち受けている仕組みとなっていたのです。

又、田の中央の畦岸には大きな岩が転がっており、そこには「荒神様」が祭られています。

この石に代掻きなどの作業で泥水を跳ねたりすると、天罰が下ると言伝えられ、毎年植え付け前及び収穫後には、必ずお祭りをしていました。

稲作の世話をするのは、私の仕事でしたので、植え付けから収穫までは毎日学校から帰ってからこの「山田」に出向き、当時は役牛一頭を飼育していた為、毎日飼料として与える青草を刈ることと、稲の生育の状況を管理することが日課でした。

巨石文化の研究に関わる中で、古い航空写真を活用することとなり、この耕作地がなんと唐人駄場の双子のサークルの片方と判明、荒神様は西のサークルの中心石、「猪囲」はサークルの外環を利用

したものと知りました。

唐人駄場周辺や唐人石には、茅の原っぱが広がっていたため、小学校の遠足や、友人たちとよく大きな石に上っては遊んだものです。特に私には唐人駄場のすぐ近くに住んでいた大の仲良しだった友人がいたため、この辺は二人の格好の遊び場でした。

このような環境で育ったためか、巨石のある風景が、ごく普通にあるものとして受け入れ、何の不思議もなく感じていました。

一九九三年、唐人駄場の素晴らしさと、その魅力を全国に発信し地域の活性化に活用していこう、先ずは地域の調査から始めることになり、これ以降、地元窓口の責任者として調査にまい進していくことになりました。

それからは、日曜日毎に天候さ

えよければ足摺半島先端部の約二千ヘクタールに及ぶ山中をくまなく調査することと、イワクラ(磐座)等の巨石の配置図を作成することになりましたがいまだに未調査地区があります。

この間、縄文人が遠く南米にまで黒潮の流れを利用し航海した、いわゆる「縄文渡海」の仮説を立て、航海の目印がこの足摺半島にありその中心が唐人駄場でなかったか、その実証に努力してきました。

土佐清水市も加わり、第一回調査には、当時昭和薬科大学教授の古田武彦氏が来清、続いて本会長である京都造形芸術大学教授であった渡辺豊和氏を招請し現地でのフィールドワークを実施します。三年間の調査を行い研究の第一段階が終了しますが、同時進行で

同郷の元市教育長だった故畑山昌弘氏を会長とした足摺縄文巨石研究会がまもなく発足し、研究活動を重ね、一九九五年十月には、アメリカスミソニアン博物館ベティ

メガーズ博士・渡辺豊和教授等々向かえ、シンポジウム「足摺巨石文化と縄文の国際交流」を開催し、足摺と縄文渡海は縄文時代の海人族が自由闊達に小船を操り、東は奥州太平洋岸、北海道、遠くは南米エクアドル、南は沖縄東南アジア南方まで大航海と国際交流について研究を深め、縄文時代に黒潮渡海による交流があったのではないか、その中継点である足摺半島に、シーマークとして遠くから望む唐人石に代表される巨石群が灯

台の役目となり、周辺に点在する沖の代・山ノ神遺跡は、これを守る人々の生活の場、唐人駄場は祭祀の場であったのではないかとの

共通認識を醸成するに至ります。

松尾は遙か縄文時代から連続と続く美しい港のある集落であったと。

第一回目のイワクラ(磐座)サミットIN山岡に参加するとともに、継続開催を提案し、第二回サミットを足摺岬で開催しました。

二〇〇四年のイワクラ(磐座)学会設立にも関わってきました。

一方では、青森県の三内丸山遺跡の発掘や富山県の桜町遺跡、鹿児島県の上野原遺跡など、それまでの縄文の常識を大きく覆す発見が続き、縄文研究に新たな光が当てられてきます。

足摺縄文巨石群は、足摺半島先端部の松尾・足摺両集落に広がる山林を中心とした約一千五百ヘクタールにバラバラアンテナ半分をカットした状態の半円が、南の太

平洋に向かつて鎮座し、数え切れないほど多数のイワクラ(磐座)が点在しています。

足摺宇和海国立公園の中心地で、立木の伐採が厳しく規制されていることから、その全貌は明らかになっていません。

障害物が少々あっても測量が出来る方法がないものか探していますが・・・。

松尾の集落内には、見事な石垣と石張りの集落内生活通路が張り巡らされていましたが、昭和三十年代から四十年代前半にかけ、コンクリート舗装でその殆んどが覆われ、往年をうかがい知ることは出来ません。

生活道で露出しているところは、幅二メートル、長さ約六メートル位と、天満宮・明神(みょうじん)宮の参道に垣間見ることが出

来ます。

石垣も又、崩壊を防ぐため、コンクリートを隙間に詰めたため、かつての輝きが失われています。

その中で唯一、今は廃墟となっているカツオ節加工施設が小道を挟み二棟並んで建っているところがあります。

一方は川に突き出た岩石を土台に三〇六メートルの高さで、もう片方は道に面して五〇九メートルの見事な石垣があります。

勿論、野面の空石積です。

少し離れた小道の橋から見上げればこれまた壮観そのものです。

このように松尾・足摺地域にはたくさんある良質な花崗岩を生活のパートナーとして利活用し、石に親しんできました。

唐人駄場のストーンサークルの外環が、原形を保ったまま現存したことは、猪対策という側面は

あったものの、古代より続いてきた石を巧みに扱う文化によるものではないかと考えます。

この地域には昔から、国有林内に分け入り、神に祭る神柴や仏を祭る櫛(しきみ)、主に枯れ木を利用して燃料の薪などに活用してきました。

櫛取りに出かけ急な降雨に合い、あわててイワクラ(磐座)の影に避難し、ずぶ濡れにならなくて済んだ等の体験話は数知れません。

白皇山にある白皇神社社殿跡には、御神体として祀られてきた三角錘状の巨石が鎮座し周辺に幅約五十センチメートル位の浜の小石を敷き詰め、注連縄を張っていました。

又、月待ち・日待ち行事で頂上

近くにあったといわれる山鎮の神、山神、猿田彦神が鎮座し、祖母が幼い私に添い寝のたびに良く聞かされた話では、里の人々は白皇山に住む魔物を沈めるために、祭りの三日前より精進した山伏たちが、三石三斗三升の赤飯を炊き、二十三日の夕方から山に入り、山鎮の神石に供えてきた、翌日行くと供物はすべて空となっていたと言われていますが、現在のこの行事は行われていません。

これ以外の信仰は、現在も巨石を御神体とする荒神さんや、竈(かまど)神社が多数存在し、現在もお里の人々が手厚くお祭りし、脈々と地域に根ざし続いています。

白磐竜宮(うすばいりゅうぐう)神社には女だけの奇祭があります。白磐は、海岸に直接黒潮流軸がぶつかり、渦を巻きながら流れる

大自然の営みが陸上より直接体感できる、日本唯一の特殊な土地です。

臼碇沖は、昔よりカツオ等の黒潮回遊魚や地付魚類の好漁場であり、紀州の漁師が最初に発見したカツオの魚場で、土佐鯉節製造発祥の地でもあります。

この海を見据える小さな高台に弁才天を御神体とする竜宮神社が祭祀され、不漁が続くと漁師の婦人たちが、社殿の前で着物の裾を控えめに捲り上げ願掛けし、大漁叶ったお礼参りの時には、大胆に裾を捲り上げ、謝意を表します。

沖合いでの漁は命がけで、陸上で待っている漁師の婦人たちが、祈願に身体を張り、夫婦・家族が力を合わせ、自己の生活を支え、現在も続けています。

一九九四年九月、これからの研

究活動のため、各地の遺跡調査を行うこととなり、最初に縄文遺跡の宝庫である東北地方を調査することとなり、メンバー八人が空路青森県弘前市に宿泊し、翌朝朝食をとりながら新聞を見て驚いた、なんと「今日三内丸山遺跡見学会」と一面トップ記事が出ています。

千歳一隅のチャンスと急遽予定変更することとして先ず掲載新聞社に電話したところ、すでに申し込みは一ヶ月前に締め切られ、三〇〇〇人が即日満杯となっているので、無理であるとの事だが諦め切れず、食事もそこそこにすぐ現地へ移動します。

到着が早朝だったため、現場周辺を散策していると、やがて見学会が始まったので、そのグループに合流し、あの有名な栗木の柱跡も見学し遺跡内をくまなく回り、その後十三湖周辺、黒又山・野中

遺跡や岩手市を調査、予期せぬ大収穫を得ました。

翌一九九五年二月、元茨木大学工学部教授岡本芳三氏より誘いがあり、奈良市で開催された研究発表会に参加し、ポスターセッション会場で神戸大学井口博夫・姫路大学森永速男両助教授（当時）から、「古地磁気学」について説明を受け、早速調査に来清する旨快諾を得ます。

数カ月後、現地にてサンプルを収集、世界初の調査の結果は「驚愕」でした。

なんと、数千トンはあるのかと思われる唐人石が、それを遙かに上回る灘の大岩等の巨石が、移動回転していることが判明したのです。（詳細は、「黒潮と縄文巨石文明 p66〜」）

巨石文化の研究活動の中で不思議な出来事がよく起きます。

一九九七年六月、大分県安心院町米神山京ら石・真玉町猪群山ストーンサークルを調査。

一九九八年三月には、佐賀県吉野ヶ里遺跡・肥前大和巨石パーク・熊本市健軍神社等で調査。

巨石文化研究会福岡会長故掘田惣八郎氏と交流、相互に訪問・調査し情報交換、二〇〇一年三月、福岡市において、堀田氏講師による古代祭祀測量法無料公開講座に参加し巨石調査活動を行っている多くの仲間と交流が始まりました。

先に述べた一九五五年に来日したベティメガーズ博士が東京憲政記念館での講演に同行したとき、全日空ホテルで歓迎パーティの際、前東京商船大学名誉教授茂在寅男氏と初対面となりましたが、その

場にて現地調査を依頼したところ  
即決快諾を得て、その後数回調査  
のため来清し、「船形石を見て、こ  
れは古代ギリシャ神話に出てくる  
「アルゴ船」ではないか。」と助  
言を受け、測量してみるとまさに  
記述に酷似していることが判明し、  
縄文人と海の繋がりメッセー  
ジを今に伝えていきます。

又、大阪の有名私立大学教授と  
唐人石について話す機会があり、  
「自分はこれまで建築史について  
研究してきたが、ここに来てはじ  
めて、現在の建築史は根本が欠落  
していると感じた。建築の原点は  
縄文時代の石組にあり、これまで  
数多くの専門家からも忘れ去られ  
ていた。古代の石建築の技術課程  
から調査するべきではないか、と  
感じた。今後勉強していきたい。」  
と熱く語られています。

多くの人々をイワクラ(磐座)に  
参集する・引き付ける魅力は何だ  
ろう。

多くの出会った人々と話して  
いると何か遙か遠くの昔から、知  
り合いのような気持ちになり、そ  
の後交流が続くのはなぜだろう。  
個々の争いのなかつた縄文人  
の意思が脈々と続いているからだ  
ろうか。

ストレス社会の現代、多くの  
人々に安心と癒しを与え続ける縄  
文巨石文化の研究は、イワクラ(磐  
座)学会とともに発展していくこ  
とと思っています。

日本の・世界の古代人が営々と  
築いてきたイワクラ(磐座)を多角  
的方面から研究を深めつつ、共通  
点等を比較・検証し、その成果を  
共有し、日本のイワクラ(磐座)学

の確立を目指すべきではないか。  
そういう時期にきていると感  
じています。

了